



1026

講談社現代新書

漢詩

の

名句・名吟

君に勧む 更に尽せ 一杯の酒
西のかた陽関を出ずれば故人無からん

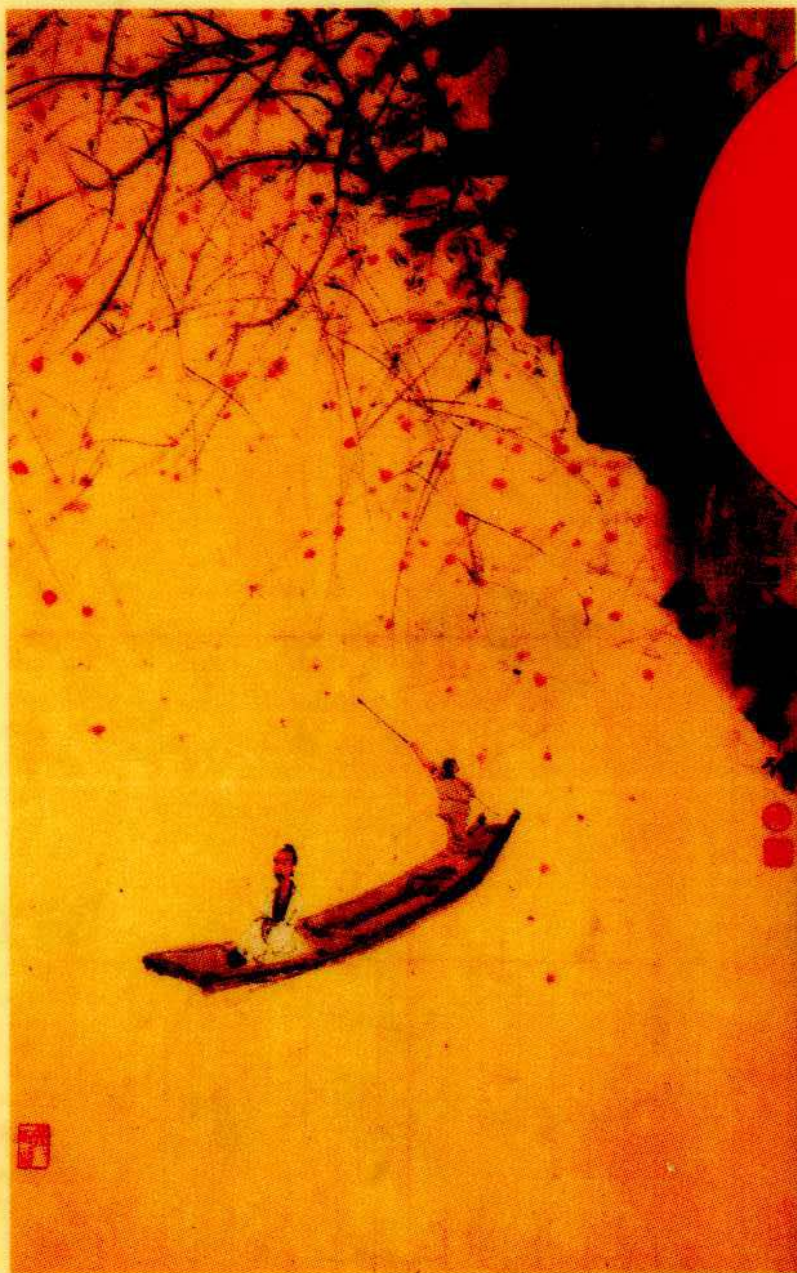
三杯の酒に大道を知り、都の月に旧友を思う……。

奔放自在な「詩仙」李白、謹厳実直な「詩聖」杜甫、

閑寂の自然詩人王維など、平安の世から日本人の心を

村上哲見

とらえてはなさない漢詩の
豊かな抒情の世界に遊ぶ。



漢詩の名句・名吟

一九九〇年一月二〇日第一刷発行 一九九〇年二月二五日第二刷発行

著者——村上哲見©Tetsumi Murakami 1990



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

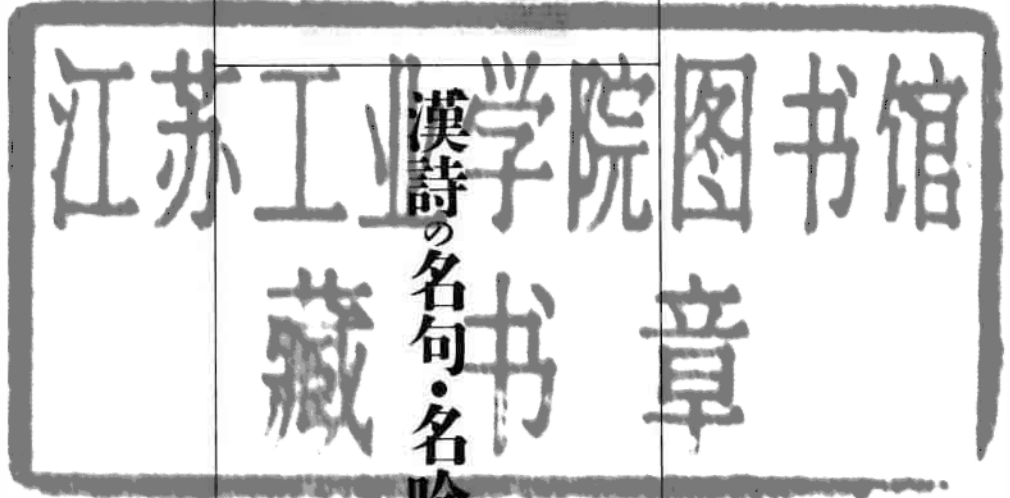
東京都文京区音羽二丁目二二―二一 郵便番号一一二―〇一 電話〇三―三九五―一一一

装幀者——杉浦康平＋谷村彰彦

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-149026-5 Printed in Japan (定価はカバーに表示してあります)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。



村上哲見

講談社現代新書

目次

序章 漢詩をどう読むか	11
-------------	----

西のかた陽関を出ずれば故人無からん	12
年年歳歳 花相似たり、歳歳年年 人同じからず	21
蛾眉山月 半輪の秋	26

I 李白と酒	29
--------	----

李白 一斗 詩百篇	30
三杯 大道に通じ、一斗 自然に合す	42
杯を挙げて明月を邀え、影に對して三人と成る	45

この世に処るは大いなる夢の若し

50

Ⅱ 月の光

..... 57

燕子楼中 霜月の夜、秋来只だ一人の為に長し 58
三五夜中 新月の色、二千里外 故人の心 66
長安 一片の月、万戸 衣を擣つ声 72
床前 月光を看る、疑うらくは是れ地上の霜 79

Ⅲ 登楼・重陽

..... 85

千里の目を窮めんと欲し、更に上る一層の楼 86
昔聞く 洞庭の水、今上る 岳陽楼 95
昔人 已に黄鶴に乗じて去り、此の地 空しく余す 黄鶴楼

IV 杜甫の律詩

123

遍あまねく茱萸しゅゆを挿さして一人ひとりを少かく 107
酔ようて茱萸しゅゆを把とりて仔細しさいに看みる 111
塵世じんせい口くちを開ひらいて笑わらうに逢あい難がたし、菊花きくか 111
須すべらく満頭まんとうに挿さして歸かえるべし 115

V 蘇州詩話

149

国くに破やぶれて山河さんか在あり、城春しろはるにして草木そうもく深ふかし 124
盤飧ばんそん市遠しとおくして兼味けんみ無なく、樽酒そんしゅ 135
家貧いえひんにして只ただだ旧醕きゅうぱいのみ
無辺むへんの落木らくぼくは蕭蕭しょうしょうとして下おち、不尽ふじんの長江ちやうかうは滾滾こんこんとして来きたる 142

曾かつて照てらせし 吳王宮裏ごおうきゆうりの人ひと 150

VI 閑寂・江南の春

緑浪 りよくろう 東西南北の水、 とうざいなんぼく 紅欄 こうらん 三百九十橋 さんびやくくしんきよう 155
 月落ち つきおち 烏啼いて からすな 霜 しも 天に満つ てん 160

171

空山 くうざん 人を見ず、 ひと 但だ人語の響くを聞く たじんごひび 172
 深林 しんりん 人知らず、 ひとし 明月来りて相照らす めいげつきたあいて 178
 千里 せんり 鶯啼いて うぐいすな 緑紅に映ず みどりくれないえい 183
 煙は寒水を籠み もやかんすい 月は沙を籠む つきすな 190
 霜葉は二月の花よりも紅なり そうよう 195

VII 旅愁・シルクロード

201

霜鬢 そうびん 明朝 みようちよう 又た一年 またいちねん

202

VIII

唐詩と日本人

229

鶏声 茅店の月、人跡

板橋の霜

208

葡萄の美酒 夜光の杯

214

春光度らず 玉門関

220

平沙万里 人煙を絶つ

224

仙台 初めて見る五城楼

230

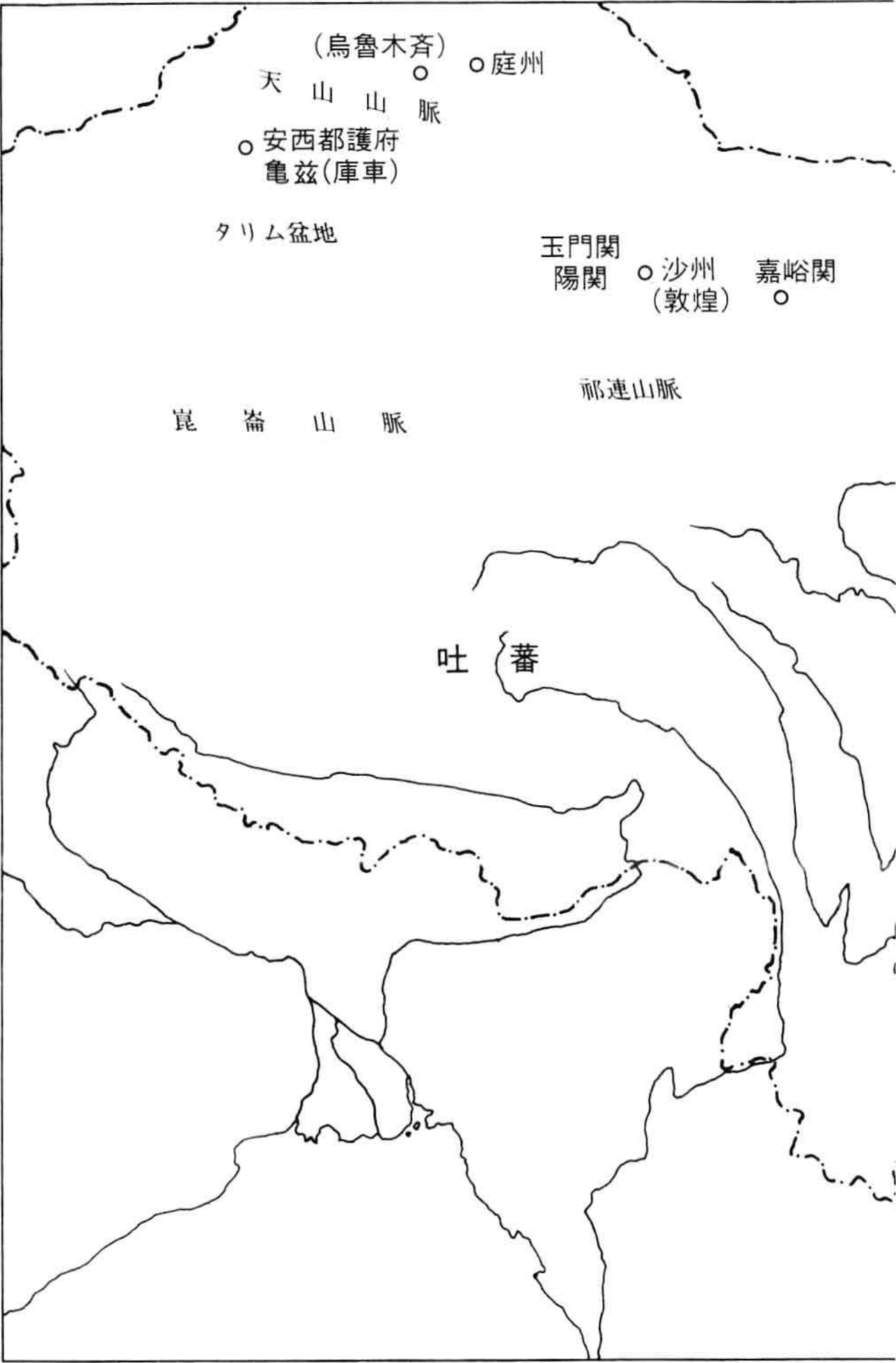
積水 極む可からず、安ぞ滄海の東を知らん

241

明月帰らず 碧海に沈み、白雲 愁色 蒼梧に満つ

248





●写真協力（五十音順、敬称略）

学研

共同通信社

月刊沖繩社

尚古集成館

天理教道友社

天理大学付属天理参考館

日本古典文学会

平凡社

吉田幸一

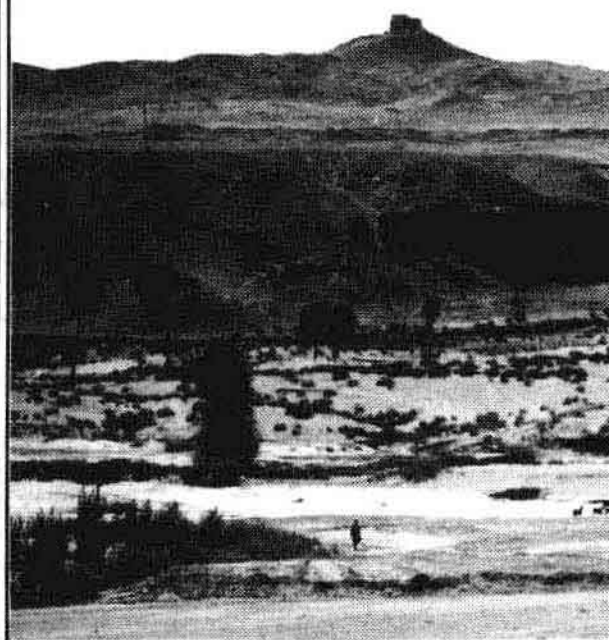
序章

漢詩をどう読むか





西にしのかた陽関ようかんを出いずれば 故人こじん無なからん



陽関跡遠景

日本では国鉄がJRに変わって、地域ごとに分割されたせいでしょうか、長距離列車というものがだんだんなくなってしまいました。中国では、あの広大な国土の、端はしから端まで走らせるような列車が、まだまだ何本もあります。たとえばみなさんごぞんじの上シヤン海ハイから、近年シルクロードブームでとみに有名になった新疆しんきやうウイグル自治区のウルムチ（烏魯木齊）まで、まるで中国大陆を東南から西北へとななめに突きぬけるように走る特別急行（特快）がありますが、上海を昼前に出発して、ウルムチに着くのは四日めの夜とい

いますから、三泊四日のあいだ同じ列車に乗り続けということになります。しかもこれだけの長道となりますと、時刻表どおりに走るとはかぎりません。ある鉄道

旅行家がじっさいに乗ってみたレポートを読みますと、ちょうど貨物列車の脱線事故に行きあわせてしまい、ウルムチ到着は十七時間の遅れ、三泊四日のところが四泊五日になってしまったそうです。

上海からウルムチということになりますと、当然のことながら西安、つまりかつて唐の都であった長安の地をとおることになります。上海からまず南京^{ナンキン}へ、ここから長江、いわゆる揚子江^{ようすこう}を大鉄橋で越えて北上し、日中戦争の初期に大会戦があつた徐州^{じょしゅう}で西へ向きを変え、唐代のもうひとつの都であつた洛陽^{らくよう}をとおり越して西安まで来ると、もう中国を端から端まで走つたような気分になりそうですが、じつは上海から西安までがちょうど二十四時間ほどで、ウルムチ行きの列車はまだ三分の一も走ってはいないのです。

そしてあとの三分の二あまり、五十数時間の道のりは、かつて長安から西北に向かって伸びていた街道、いわゆるシルクロードとほぼ重なることになります。

今から千二百年ほどむかしのこと、長安を旅立ってこの道をたどって行く人を見送る有名な詩を思い出していただきます。「君^{きみ}に勸^{すす}む 更に^{さら}尽^{つく}せ 一杯^{いっぱい}の酒^{さけ}」というあの詩です。

渭城^{いじょう}の朝雨^{ちやうう} 輕塵^{けいじん}を浥^{うるお}す

渭城朝雨浥輕塵

客舎きやくしゃ 青青せいせいとして 柳色りゆうしよく新たなり

君きみに勧すすむ 更さらに尽つくせ 一杯いっぱいの酒さけ

西にしのかた陽関ようかんを出いずれば故人こじん無からん

(王維おうい「元二げんにの安西あんせいに使つかするを送おくる」)

客舎青青柳色新

勸君更尽一杯酒

西出陽関無故人

——王維「送元二使安西」

この詩は作られてまもなく曲がつけられ、送別の歌としてよく歌われたようです。そこで「陽関の曲」とか、あるいは三回くりかえす歌いかたがあつて、「陽関三疊」などと呼ばれることも多いのですが、もとは右にしるしたような題がつけられておりました。

題にみえる「元二」という人は、「元」が姓で「二」は次郎さんというほどの呼び名、本名はわかつておりません。その人が「安西」に向けて使者として出発するのを送る詩です。「安西」は安西都護府とごふのこと、西域地方さいいき、今の新疆ウイグル自治区の一带を支配する総督府です。

日本でいえば、大和朝廷が東北地方を支配するために置いた陸奥国府むつこくふなどがこれにあたるとでしょうか。わたしの住む仙台の東に隣接する多賀城市たがじょうに、この陸奥国府の遺跡があります。ただし安西都護府と陸奥国府とが決定的に違うのは、平城京から多賀城への道が、そこでほとんど行きどまりであつたのに対し、長安から安西都護府への道は、そこからさ

らに西へ向かって伸び、パミル高原を越えてペルシャやインドへと続いておりました。安西都護府はその地域を支配する拠点であったばかりでなく、ユーラシア大陸を横断するルートを確認するための拠点でもあったのです。

この安西都護府が置かれた場所は、唐代でも時期によってかなり移動しているのですが、王維のさきの詩が作られたころ、つまり唐がもつとも栄えた盛唐のころは、長安から敦煌とんこうを経てずっと西へ伸びるルートの天山山脈の南のふもと、タリム盆地の北辺、現在の新疆ウイグル自治区のクチャ（庫車）のあたりだったはずで、現在も敦煌の東に安西という町があるのですが、それは唐の勢力が衰えてずっと後退した位置にその地名が残ったのです。

現在は天山山脈の北側にあるウルムチがこの自治区の中心になっており、鉄道もそちらの方に通じているのですが、唐代のシルクロードは、嘉峪関かよくかんを過ぎたあたりで今の鉄道の筋からは離れて西へ向かい、敦煌を経て天山山脈の南側をとおり、いわゆる天山南路がメインルートでした。ですから天山の南のふもとのクチャのあたりに総督府がおかれていたのです。長安（西安）からの道のりは、ウルムチまでよりもさらに遠いことになります。

陝西省西安、唐代の長安は、渭水いすいという川の南側にあり、西北に向かおうとすれば、まずこの川を渡ることになります。北側には咸陽かんようというこれも古い町がありますが、詩のは